

「かつて私を苦しめた症状が今では思い出となった」

佐久智代（33才）

私の苦しみ、母の痛み

私のような患者を救う最も効果的な治療法は子宮全摘しかない、これまで繰り返し医師から言われてきた。今の症状は10代後半から始まり、33歳になった現在ピークに達した感じがする。

更年期になれば筋腫は治ると言われているし、もう私の子宮筋腫人生も後半に入ろうとしている。いわゆる更年期により近づきつつあるから、いつかはこの症状も軽快し、元気になって行くのではないかと自分に都合のいいように考えたりもしていた。

母は私を産んで間もなく出血がひどく子宮全摘をしたと言っているが、その当時からすると医学も格段に進歩しているはずである。子宮全摘の弊害より害が少なければ何でもいい。薬の副作用が大であっても構わない。また完全に治らなくとも我慢することもできると思う。

今になって、長年守り続けていた子宮を失うと言うことは、今まで苦しんできた私の青春、人生は、一体何だったのだろうかと思う。

また、母は、自分の筋腫が私に遺伝したものと考えている。苦しむ私を見るにつけ、ごめんね、こんなあなたに産んでしまってとしきりに母は自分自身を責めているようだ。私を不憫に思っているのだろう。

患者に親切にする医師には下心がある

私が図書館で見つけた『子宮をのこしたい10人の選択』を読んだことをきっかけに、広尾メディカルクリニック（以下広尾MC）での手術を望んでいることを知ると、日赤病院に何の不満があるのかなどとそのことを思い止まらせようとした。

母には知らせず手術を決行すべく広尾MCに向かうつもりであったが、それを察知した母はとうとう飛行場まで私を引き止めに先回りして来てしまっていた。その母に対し、手術に先立っての診察時のことを話した。

1. 筋腫を摘出し、子宮を保存できると言われたこと。
2. 疲労しきって帰る幽霊のようなわたしに同情し、先生がご自分の車で羽田まで送って下さったこと。

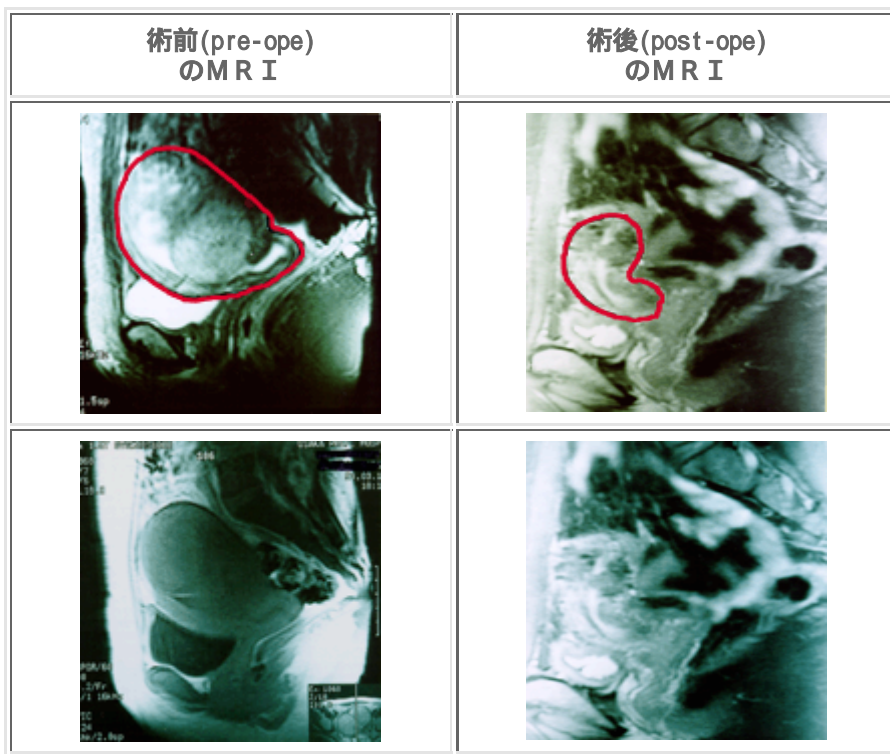
このことを聞いた母は、そこまで親切にする医者には何か魂胆、下心があるに違いない、もう二度と行かないでくれと怒り、泣きながら懇願した。

手術を終えた現在

母は目を細めながら、手術を受けてよかったね、と言って、あまりにも元気に様変わりした私を見つめている。あれほどまで強く反対していた過去の自分の姿をケロリと忘れているのも彼女らしい。ときおり、食事のとき、黙って考え込みすすり泣く姿を見ると、これで遺伝問題も解決した、と過去を振り返って思い出しているのだろう。

めまい、腹痛、眼瞼結膜、口腔粘膜も色が薄く、排便の際は、肛門から背中にかけて突き上げるような痛みが走り、心臓を引き下げられているような感じがした出血など、思い出となってしまった。

先生いつまでもお元気でもっともっと多くの患者さんたちを救ってあげてください。この感謝の気持ちは死ぬまで忘れません。



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	325	439
血色素(Hb)(g/dl)	4.9	13.2
ヘマトクリット(Ht)(%)	18.8	40.5
CA125	>240	7.5
CA19-9	360	31.8
備考	横切開 術前輸血 2000cc 摘出物： 305g 子宮筋腫 300g 内膜ポリープ(polyp) 5g 両側卵巣など正常、温存	

「二度人生を頂いたような気持ちです。」

橋口久美子（36才）

会社の子宮癌検診で分かった筋腫

中学生の頃から生理の量も、その痛みも病的と考えたことは一度もありませんでした。

会社の検診、子宮癌検診において恥ずかしさはありませんでしたが、さほど躊躇することもなく、人生初めての婦人科診察を受けました。元気な時、病気というものは他人事であり、自分には関係のないものだとずっと思っていました。検査をされる先生が内診を始めた瞬間、エッと息をのんだ声を発したのは少々驚きました。そして、私の腹部を強く押さえて検査しながら、「これで何の症状もないのかなえ……。」と小声で呟きながら、私の顔をけげんそうに覗きこみました。先生の眼鏡の奥の目は信じられないと言ったような眼差しで、あたかも私を疑っているかのような見え方でした。ちょっと前まで優しく対応してくれていた先生が別人のように変わってしまったかのように思えました。

また、このとき私自身、先生から質問された頻尿、便秘の件についてさえ、子宮のことと果たして関係があるのだろうかと思っていたくらいでした。頻尿、便秘などは、健康的などんな人間にも日常生活をしている中でときとして起こりうることであり、私だけに限った特別なことではないと思っていました。したがって、先生の口から手術をしなければダメだよと言われたときの私のショックは他人に対して表現しようもなく、突然、奈落の底へ突き落とされたような気持ちになってしまいました。

しかし、こんな状況下にあいながらも、時間が経過し自分自身落ち着きを取り戻したときには、楽観主義的な気持ちも少し芽生えても来ました。そのとき、先生が、ハッキリと子宮を全て摘出するとは言わずに、手術をする必要があるというようなファジーな表現をされたことは、手術をすることによって子宮を残してくれる可能性があるというような期待感を私に少なからずですが抱かせてくれました。

うずまく不安な気持ち

大きな病院に行きなさいと、ある市民病院あての紹介状を先生は書いて下さいました。大きな病院なら子宮を残してくれる手術をしてくれるかもしれないというような楽観主義的な期待感も持っていましたが、子宮がなくなってしまうという最悪の事態も想定していました。

そんな気持ちのまま紹介された市民病院に向かいました。覚悟はできていたせいか、当日の診察は比較的冷静に受診することができました。しかし、診察が終わり自分で車を運転しながらの帰宅途中にいろいろなことが脳裏に浮かんできました。もし検診を受けずに何も知らずにそのまま過ごしていたら、この先一体どうなっていたのだろうか。

自分が子宮筋腫という病気を抱えている病人であるということがハッキリと分かってよかったと思う反面、今後この病気に対し自分自身がどのように向かい合っていくのだろうか、などという不安な思いも頭の中をよぎってきました。結果として力になれるのは自分自身以外にないということがわかっているものの、自分の無力さに情けなることばかりでした。

子宮と言う言葉はタブー

いつも私の縁談話にヤキモキしている父、そして、条件の良さそうな縁談話に対しても期待を裏切ってしまう私。過去に自分のことで家族にどれほどの迷惑や心配をかけ続けたことが。いままでのことを考えると、私のこの子宮という病気のことさらに家族に心配をかけたくなかったという気持ちがありました。特に母にはこの子宮の病気のことを知らせたくはありませんでした。

なぜなら、私は両親が結婚してようやく6年目にできた子どもであり、母が幾度かの流産という試練を乗り越えて産んでくれた子だと母から聞いていたからです。私が子宮筋腫という子どもを産めなくなるような病気だと知ったときのその母の落胆ぶり、想像するだけでも余り有ることでした。そんなこんなで、とにかく“子宮”についての会話は我が家ではタブーとなっていました。

大学病院での診察

前回受診した病院と同様、子宮を摘出するしかないとまた言われてしまうのか、それとも、漢方、ホルモン、薬物療法で治療を行ってみようと言ってくれるのか、大きな不安と微かな期待感を抱きながら大学病院の門をくぐりました。

自分の順番を呼ばれるまでの待ち時間がたいへん長く感じられ、その間、周囲の患者さんを見渡しながら、あの人は順調に妊娠しているのだろうか、それとも私と同様の子宮筋腫の病気に冒されているのだろうかなどと、いろいろと思いを巡らし、盗み目でお互いの腹部を見合っていました。

超音波エコーの検査結果で、筋腫の直径が前回の病院での検査より、今回の病院の検査の方が2cm小さく診断されました。今度の病院の先生の方がいい先生だなどと自分にとって少しでもいい結果にほんの少しの嬉しさを覚えていました。

患者の立場からすると、少しでも自分の病気を軽く診断してくれる医師をいい医師だなどと評価してしまいます。こんなことがおかしいのはわかっていますが、病気のことで頭が一杯な立場にいる患者にとってその病気の症状を軽くみってくれる先生の方がよく見えてしまうのです。

こんな患者の心理を理解し、医師が「このまま様子を診てみましょう」とよく患者に声をかけることがあります。これも病状の重い患者への癒しの言葉であり、少しでも症状を軽く診断して欲しいと願っている患者側に立って考えている医師の気持ちを表した一つの言葉なのだと思います。

しかし、この大きな病院でも診断の結果説明は全く同じでした。子宮全摘しかないと他人事のようにあっさり言われました。私はその場で泣き出しそうになり、子宮を摘出しないで治療してくれる病院をご存知ありませんかとワラをも掴む思いでお尋ねしました。するとその若い先生は目線をそらしながら、以前にレーザーを使用しながら手術をして子宮筋腫の患者を救っていると言う医師の噂を聞いたことがあると首を傾げながら答えて下さいました。

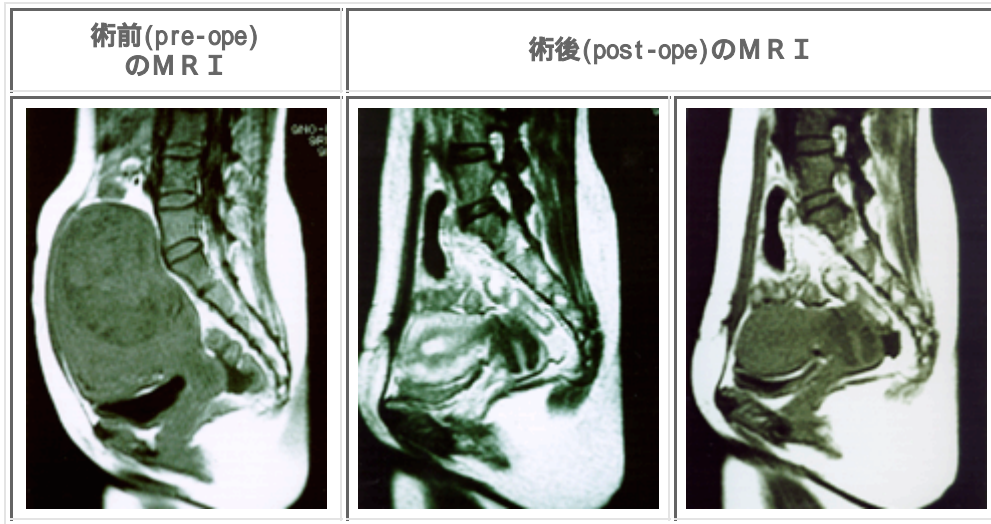
やっと探し当てた宝物

さあ、そこからが大変。その日の帰宅途中からもうすぐにその噂のドクターを探し出そうと必死になりました。その医師の著書を発見しようと次々と本屋を回りました。本棚の片っ端から子宮と言う二文字を探し続け、それらしき本を買い漁りました。しかし、どの本を手にしてもその結びの章の内容は同じで、子宮を摘出されても女には変わりはないとか、大丈夫だから安心して摘出されましようなどの意味のことが書かれたものばかりで、私の気持ちに追い討ちをかけるような本ばかりでした。

最後の手段として図書館に行って探してはみましたが、本の中に書かれている内容と言ったら同じように子宮摘出以外にないというようなことばかりで哀しくなってきました。本からその医師の存在を知るのは無理かなと諦め半分の気持ちで図書館の職員に蔵書リストを検索してもらいました。すると、現在は貸出し中ではあるが、『子宮をのこしたい10人の選択』という本があるのわかりました。

私はそのとき宝物でも探し当てたかのような気持ちになり、その場で小躍りしてしまいました。そして、探し当てた本の医院、『広尾メディカルクリニック』での手術をすぐに決意しました。手術は無事成功しました。私の現在の気持ちは二度人生を頂いたような感じです。

斎藤先生、病院のスタッフの皆さま本当にありがとうございました。一生忘れ得ぬ思いでいっぱいです。



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	393	412
血色素(Hb)(g/dl)	12.4	13.2
ヘマトクリット(Ht)	361	397
備考	横切開 6cm 摘出物 : 715g 両側卵巢など正常、温存	

苦しみ続けた日々

思えば、中学生の頃から生理痛は重く、市販の鎮痛剤を飲まずには過ごせませんでした。市販の鎮痛剤で痛みが治まっていた頃はまだよかったのですが、就職した20歳の頃には、ほとんど気休め程度にしかなくなってしまいました。

数年後には、生理のひどい時は立ち上がったたり、動き回ることさえできず、とても仕事などできる状態ではありませんでした。ただただ、横になり、痛みをうめき声をあげるしかない状態でした。ひたすら、大事な仕事の日と生理が重ならないよう祈るしかありませんでした。

婦人科受診・・・子宮腺筋症

母は婦人科に診察に行くことをすすめましたが、恥ずかしいなどの気持ちから診察に行く気になれず、25歳で結婚したのを機にいくらなんでもこんなに痛いのはおかしいだろうということで、初めて婦人科を訪れました。

MRIなどの検査結果から先生の診断は、「子宮腺筋症」ということでした。その時点で子宮腺筋症の詳しい知識があったわけではありませんでしたが、「ああ、やっぱり病気だったんだ。」と不思議と納得しました。

治療・・・骨粗鬆症

はじめはとりあえず、強力な鎮痛剤をもらうだけでしたが、そのうちその効力も薄れてきました。私の子宮は時間を経るごとに大きく肥厚していきばかりでした。先生は治療方法としては子宮摘出か、擬閉経療法があるけれど、私はまだ出産する可能性もあるだろうということで擬閉経療法を選択され、スプレキュアというホルモン剤を半年間続けました。

他の方の体験談を見ていると、スプレキュアの副作用がつらいとよく書いてありましたが、私はそういうこともなく、生理がないのでとても快適な半年間が送れました。

しかしながら、この治療法で確かに子宮は小さくなったらしいのですが、また生理が来るようになれば同じことの繰り返しです。その後、鎮痛剤で痛みを抑え、抑えきれなくなるともう1クール（半年間）スプレキュアでのホルモン療法を行いました。その結果、骨密度が減少し、骨粗鬆症の薬も処方されるようになりました。

精神的苦痛

もう、ホルモン療法はできません。ただただ、鎮痛剤で痛みを抑えるしかなく、生理の期間中、2日ほどは必ず仕事を休むしかありませんでした。痛みのあまり、夜も全く眠れませんでした。体験談レポートにみなさんよく書いておられますが、本当に死んでしまった方が楽なのではないかと思いました。

会社は男性の多い職場で、毎月腹痛のため休むので変に思われていましたが、課長に正直に病名や症状を打ち明けると、最近は女性に多い病気だからと理解し同情して下さいと少し気が楽になりました。

しかし、どうしてもはずせない大事な仕事の日に私が休んで実際に困る同僚や上司はどう思っているだろう？今から思えば、みんないい人たちなのですが、痛みを苛まされ続ける私は精神的にもますます不安定になって行きました。

決断

その頃インターネットで広尾メディカルクリニックを知りました。子宮を残して腺筋症を治せるのは魅力でしたが、料金が高額であることなどから躊躇していました。

この頃にはひと月の半分以上の間、激痛ではないにしろ下腹部と腰に痛みがあり、痛みのひどい時には嘔吐することもあり、子宮は大きくなりすぎて膀胱を圧迫し、頻尿にもなっていました。かかりつけの先生は、もう外科的処置をしないとおっしゃいました。出産する可能性があるからという意味だけではなく、ホルモンのバランスを崩したくないから子宮は摘出したくありませんでした。

そんな6月初旬のある日、腹痛のため早退させてほしいと上司に言ったところ、「また？」と言われました。その人にとっては他意はなかったのですが、私は深く傷つきました。心の痛みと下腹部の痛みを泣いている私を見て、主人が「診察に行こう、予約しておきなさい。」と言ってきて、広尾メディカルクリニックを訪れ、そして、斎藤先生は力強く「救えるよ。」と言って下さったのです。

子宮保存手術

そして、次の生理を待たずに平成10年6月29日に手術していただくことになりました。

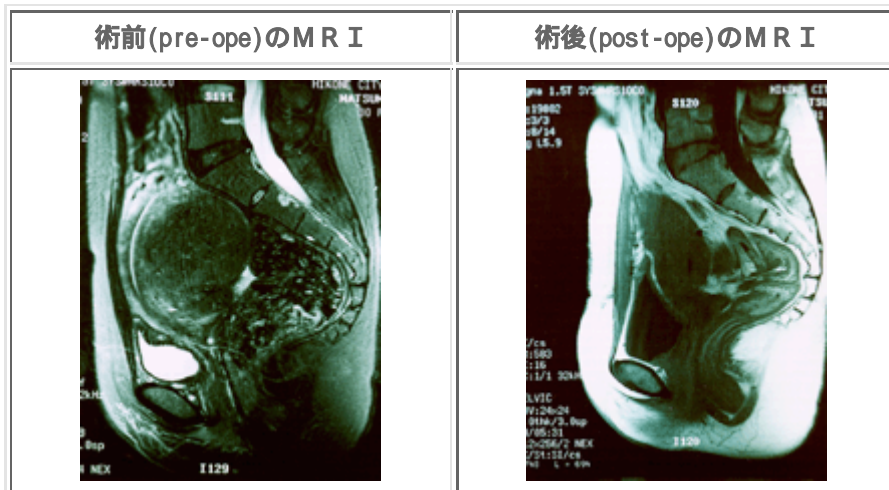
麻酔は下半身のみのはずなのですが、手術中の記憶はほとんどありません。すごく寒かったことだけ覚えています。術後の手術創痛みもいつもの生理痛に比べたら大したことはなく、快適な入院生活でした。歩けるようになったら同じ日に手術した方と一緒に食事をとったり、おしゃべりしたり、今でも、メールなどで連絡を取り合っています。

退院後1カ月くらいしたら生理になると聞いていましたが、ちょうど1カ月後に生理になりました。それまでは、生理が始まる1~2日前から激しい痛みがあって、もうすぐ始まるんだなというのがわかったのですが、その時は、生理が始まったことにも気付きもしませんでした。全く痛くなかったのです。どれほど感激したでしょう！本当に言葉では言い表せないほどでした。

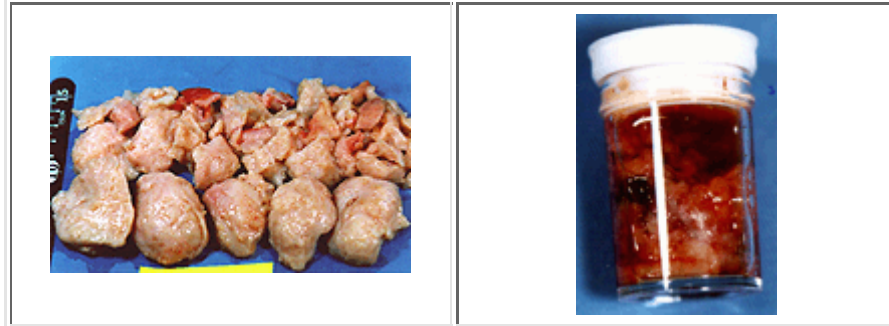
早速、斎藤先生に報告とお礼のメールを書きました。

あんなに苦しかった痛みから解放して下さった斎藤先生には感謝してもきれないほどです。現在は事情があって以前の職場は退職しましたが、何をするにしても生理痛のために制限されていた手術前とは違い、何でもできる可能性を大切にこれからいろいろなことに挑戦して行きたいと思っています。

斎藤先生、広尾メディカルクリニックのみなさん、本当にありがとうございました。そして、これからも以前の私と同じ苦しみに耐えている女性たちを救ってあげてください。



摘出物



	術前 (pre ope)	術後 (post ope)
赤血球(RBC)	424	446
血色素 (Hb)(g/dl)	12.7	13.3
ヘマトクリット(Ht)	38.3	40.2
CA-125	390	30
備考	横切開 10cm 麻酔・硬膜外・腰椎麻酔 摘出物 : 腺筋症 (Adenomyosis) 260g 子宮内膜ポリープ 7g 病理 : 悪性ではない	

「-----礼状-----」

齋藤智子（29才）

拝啓、齋藤先生

'1989年6月に子宮筋腫と卵巣を手術していただいた齋藤です。あれから5年が経過し、体調も良く、朗報をお知らせすることが出来るようになりました。

来年2月に待望の子どもが出産できる予定です。現在5か月18週で、安定期に入り主治医ももう安心と言って下さいました。いただいたMRIとCT、OPE経過記録を主治医に見せ、筋腫・子宮の状態をよく知っていただきまして、帝王切開ではありますが、2月の出産予定です。『教科書に載せられるような写真だね』と主治医も感心していました。

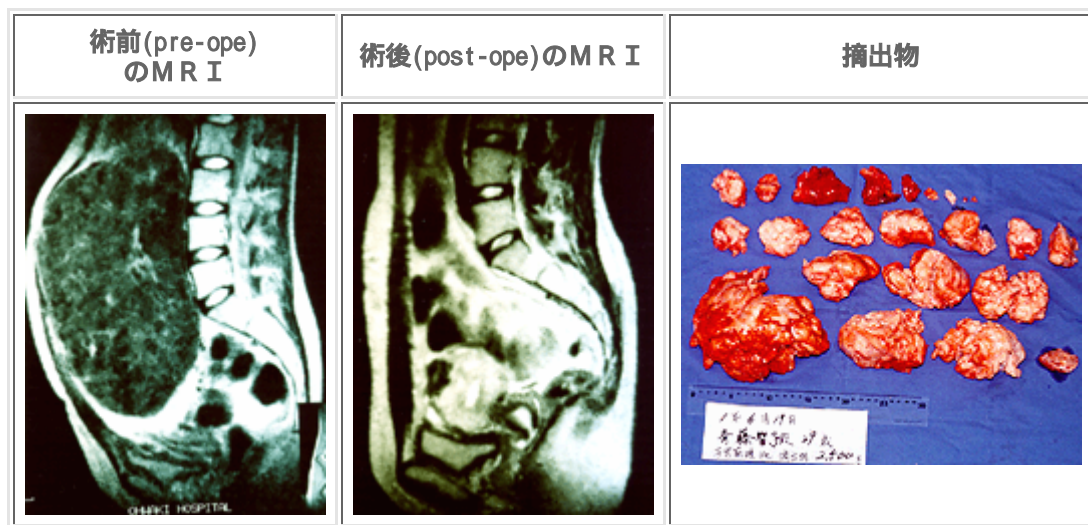
私も病院勤務12年目ですが、保険制度やさまざまな医療制度があって、まだまだ大変でしょうが、私のようなところで『全摘』としか診てくれなかった患者を、幸せな妊婦へと変身させて下さいました。先生方の御苦勞を思い、また、一人でも多くの方が可能性を最大限に残せるような医療を望んでおります。

切ってしまうのは簡単です。でもその心の葛藤と精神的苦痛を本当に理解してくれる医師が少ない現状をこの筋腫手術を通して知らされました。

先生に出会えて本当に良かったと、日々大きくなるお腹と共に感謝申し上げます。

無事産まれましたら、写真と共に御報告いたします。御身体を御自愛なさって、頑張ってください。

'1994.9.19 齋藤 智子



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	404	464
血色素(Hb)(g/dl)	8.9	12.5
ヘマトクリット(Ht)	28.2	37.1
CA-125	30.0	18
備考	1986年に国立S病院にて開腹手術 open close その後G大学で子宮全摘を告げられた 摘出物：筋腫 2500g 右卵巣部分切除 病理：良性 術後：妊娠	

「わたしの広尾メディカルクリニック体験談」

町 雅子（34才）

「夏休みをどう過ごしましたか？」私はというと、8月11日、ただいま入院中。通信がお手元に届いたときには退院しているわけですが、これを書いているのは病室です。子宮筋腫を取る手術をしてもらいました。8日（月）の朝に入院し、午後手術、その夜は麻酔が切れた後のお腹の痛みに苦しみました。火曜はお腹のガスがなかなか出なくてそれでちょっと苦しみました。夕方からは歩き始め、ワープロも打ちました。水曜にはお腹に刺していた管（出血や浸出液を取り出すため）を抜いてシャワーを浴びました。点滴と、お腹の傷の痛みをかばって前かがみに恐る恐る歩いていることを除けば、気分は良好です。

ことの始まりは4月末。内臓に何となく違和感があるのが気になって、会社の帰りにちょっと時間があつたので、行きつけだった等々力の内科にふらっと寄ってみたのです。先生が超音波でお腹を診て「これは内科じゃなくて婦人科ですね。すぐに婦人科に行くように。」そして近くの婦人科に紹介状を書いてくれました。

それからしばらくの期間、婦人科でいろいろな検査をしました。とにかくお腹に10cmくらいの大きなカタマリがあるということです。「超音波の専門の先生に診てもらいましょう」「超音波ではわからないのでCTスキャンで検査をしましょう」「CTではわからないのでMRIが必要です」MRIとは磁気共鳴画像というもので、強烈な磁力線を出してそれでお腹の中を映像化するのです。装置が高価なので大病院にしかないということ。婦人科の先生のお兄さんが大学の婦人科の助教授だということで、その大病院で検査をしてもらいました。助教授の先生は「子宮が腫れているのか卵巣なのか開腹してみないとわからない。子宮筋腫の場合、筋腫だけを取るようにします。ただし、100%子宮を残すとは言えない。」子宮を全部取ってしまう可能性が10%あると言うのです。いくら10%と言われても、手術が終わってみたら既に子宮はなくなって「その10%でした」と言われたらおしまいだし...。これが7月半ばのことです。

その間に本も少し読みました。子宮筋腫・子宮ガン卵巣腫瘍の本や『病院の検査がわかる本』、『日本の名医』といった類の本などを買って読んだり立ち読みしたり。たまたま買った本『子宮をのこしたい10人の選択』（婦人画報社）はその中の1冊でした。それはレーザーメスを使った子宮筋腫の手術の話でした。読んでみると、レーザーメスを使うと出血が少なくすむので、出血多量のために子宮を全部取ってしまうことが非常に少ないし、小さな筋腫まで残さず取れるらしい。これはいい。健康保険がきかないので自費と知ったときはちょっと躊躇しましたが、払えない金額じゃありません。夫にもこの本を読んでもらい、この先生に診てもらおうということになりました。大病院で「子宮を残す確立90%」と言われた数日後にこの先生の病院に電話をし、診察を受けました。「大丈夫ですよ、子宮を残せますよ」という先生の言葉、予想していたとは言え、あまりにあっさり言われて「ほんまかいな」と拍子抜け。さっそく手術の予約をすると、何と超ラッキーなことに、会社の夏休みが始まってすぐ手術が受けられることになったという訳です。

手術は腰椎麻酔でした。腰から下はほとんど感覚がないのですが、意識はあります。アイマスクをつけているので周りが見えませんが、手術室の中の空気が張りつめている感じが伝わってきます。私は「通信のネタにしよう」と意識を集中させていたのですが、気がつかないうちにお腹が切られていたようでした。お腹が引っ張られるような感じがして、どうやら手術が始まっているようだ気がきました。先生が「卵巣は正常ですよ、子宮も残せますよ」と声をかけてくれました。そして、お腹の中から何かを引きちぎって取っているような感覚。きっと筋腫を取っているんだろうな。そのうち私は緊張のせいか脳貧血のようになってしまい、気持ち悪くなるやら息苦しくなるやら。しかし手術の方は無事進んでいるようで、髪の毛を焦がすような匂い（レーザーで何かを焼き切ったのか）がしていました。その後、急に雰囲気は静かになってどうやら手術が終わったようです。この間、約1時間半。

取ってもらった筋腫は560gありました。ホルマリン漬けた筋腫をビニール袋の上からさわると、ゴリゴリした感触で骨のようでした。固さにびっくり、もっとも筋腫が大きいから症状が重いというものでもなく、小さい筋腫でもできた場所によって症状が重いそうです。私の場合これといったひどい症状がありませんでした。先生には「こんなに大きなものがあつたのに、鈍いというか...」と言われてしまったくらい。確かに言われてみれば、以前に比べて生理痛が重くなっていたし、出血量も多くなっていたけど、寝込んだり、貧血になったりするほどではなかったの、まったく気にしていなかったのです。

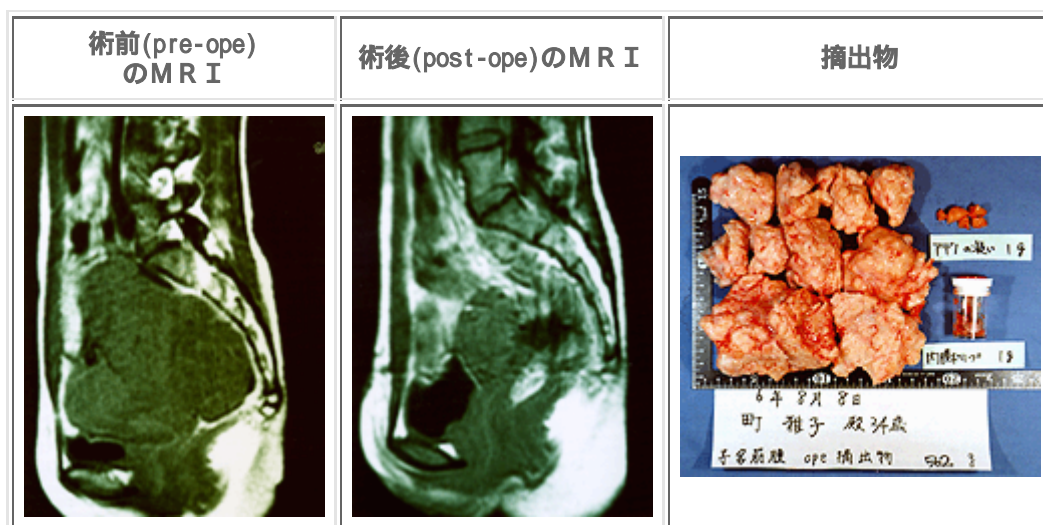
この病院は（というより先生がというべきか）ちょっとフツーじゃありません。木曜の夕食時、見舞いに来ていた夫と私に先生から何と缶ビール差し入れが！もう飲んでもいいんですか？と看護婦さんに聞くと「隣の部屋の方は昨日から飲んでますよ」だって。金曜のお昼には、患者2人を含め病院内のスタッフそろって（といっても全員で10人）、快気祝いのお食事会。会場は病院内のリビングダイニングです。病院の中にこういうスペースがあるのも不思議です。シャンパンを抜いて乾杯！食事の後はデザートケーキとコーヒーまでいただきました。さらにその晩は消灯の9時過ぎから1時頃まで先生とおしゃべり。「おやすみなさい」のあと看護婦さんに睡眠薬をもらって本当の消灯。

こんなのアリ？もっとも入院患者の方もちょっと変わっていたようです。今週の入院患者は私とYさんの二人。Yさんは退院の日になんと和服に着替えるという“超”粋な方。相当珍しいと思うよ。私はというと、病室にワープロを持ち込んで、こうやってしこしこと書き物をしているというワープロオタク(?)。患者さんから「そういう患者さんは初めてですね～」と言われました。

てなわけで、5泊6日の入院生活を終えて、実家で8泊9日、ゴロゴロしながらこうしてワープロして、これが私の夏休みでした。

P.S.夏休みあけから社会復帰してます。

『たんぽぽ通信』(第59号・1994年9月発行/編集発行人:町雅子さん)から



	術前(pre ope)	術後(post ope)
赤血球(RBC)	353	432
血色素(Hb)(g/dl)	10.9	13.8
ヘマトクリット(Ht)	33.9	40.8
CA-125	49	16
備考	切開部 6 cm 両側卵巣正常 摘出物 : 562g	

32週目の緊急出産

長男の大地（だいち）が生まれたのは99年1月2日。偶然にも主人と同じ誕生日になって新米パパは大喜びでしたが、妊娠32週で生まれた未熟児であったため、すぐにNICU（新生児集中治療室）に移されました。

生まれた時の体重が1282グラムで、小さな小さな赤ちゃんでした。その割には目鼻立ちがはっきりしていて、「未熟児でもこんなにしっかりしているんだ、これなら大丈夫」と、早産してしまった自分を励ますように保育器の中の大地を見つめていたことを思い出します。

32週で急遽、出産することになったのは、妊娠中毒症のためです。28週を過ぎる頃からむくみや糖尿、体重増加などの症状が表れはじめて、通院していた東邦医大病院で妊娠中毒症と診断され、大事をとって30週目から入院していました。

98年も暮れようとする大晦日になって症状が一段と悪化し、「これ以上、妊娠を継続すると母子共に危険」との主治医の判断で、新年早々の帝王切開となりました。入院してからというもの、「一日でも長く、10グラムでも大きくなってから生まれてほしい」と願っていましたが、これ以上は無理、との主治医のお話に、今度は「どうぞ無事に育ちますように」と祈るような気持ちで帝王切開手術に臨みました。大地という名前は「大地に根を張って大きく育ててほしい」という私たちの願いを込めたものなのです。



元気がなにより

大地は体重が2,600グラムになるまで2ヶ月あまりNICUでお世話になりました。妊娠中毒症のため産後3週間入院していた私は、入院中、NICUにいる大地に会いに行くことが何よりも楽しみでした。NICUは私の病室のすぐ横にあり、大地にいつでも会えるという安心感もありました。眠ってばかりいた大地が、やがて大きな泣き声をあげるようになると、それだけでも嬉しくて、くちやくちの泣き顔を飽きずに眺めていたものです。

一足先に退院した私に続いて、3月には大地も無事に退院。おかげさまで未熟児で生まれた後遺症もなく、元気に育ってくれています。ミルクを飲むのに時間がかかったり、月齢の標準体重にはまだ届かなかったりと未熟児で生まれたハンディはありますが、小粒ながらとても活発で、ひとときもじっとしていません。

這い這いで部屋中を動きまわり、目を離した隙にスリッパをなめていたりして油断できませんが、元気がなにより、無事に成長してくれている大地は私と主人にとって大事な大事な宝ものです。

キンシュ、って何？

出産も緊急手術でしたが、実は大地の生命は、妊娠9週目でこれも緊急手術によって斎藤先生に救っていただいた生命なのです。

この体験談レポートの40号で中村多恵さんが書いておられますが、期せずして中村さんと同じ日に同じ手術を受けた妊婦が私なのです。中村さんとほぼ同じ時期に、妊娠と子宮筋腫が同時にわかり、いくつかの病院を経て広尾にたどり着きました。そして、MRIの検査を受けた当日に緊急手術となったのです。

妊娠がわかったのは98年の7月1日。そろそろ子どもが欲しいなと思っていた矢先の妊娠でした。最初に行った近所の総合病院で「妊娠はしていますが筋腫もあるので、大きい病院に行かれたほうが…」と言われたときには、キンシュ？何、それ？、という感じで、新しい生命が宿ったばかりの子宮に筋腫ができていくという事実をすぐには理解できませんでした。

筋腫があると言われてもピンとこなかったのは、それまで筋腫を疑う自覚症状が全くなかったからです。生理痛もそれほど強くなかったし、出血の量も、これは他人と比べることができないため「こんなものだろう」と思っていました。母や親戚の伯母たちからも子宮筋腫があるという話は聞いたことがありません。

体験記に希望を見出す

近所の総合病院で「大きい病院へ」と言われて、とりあえず義父の紹介で恵比寿のK総合病院へ行きました。ここでは特に流産や胎児の危険性については言われませんでした。ただ筋腫があると早産の可能性が高いのでNICUのある病院に通ったほうがよいと言われ、新宿のT医科大を紹介してもらいました。

これでやっと産む病院が決まったと希望をもってT医科大に行ってみると、そこでは「これだけ筋腫が大きいと胎児は絶望的。しかし、こういう状態では筋腫をとるわけにもいかない」と言うのです。つまり、自然流産を待って、その後に筋腫を摘出する手術をしましょう、という意味なのです。

大学病院なら、と行ったT医科大ではかばかしい答えが得られず、私も家族も落ち込みましたが、その一方で、為すすべもなく自然流産を待つなんてとてもできない、と思いました。母は母で、子宮を全摘されてしまうのではないかと心配したようで、「子宮をとってしまったら、二度と妊娠することはできないのだから、それだけは絶対にダメ」と強い調子で言いました。

私に筋腫があることがわかったときから、母の胸のうちには広尾のことがあったようです。それというのも、母の知人が広尾で手術を受けており、母はその方を通して、広尾では子宮保存手術を行っていること、ホームページで情報を公開していることなどを聞いていたのです。

母の話聞いて、主人がさっそくインターネットにアクセスし、朗報をもってきてくれました。「広尾では妊娠初期に胎児を救う手術を行っていて、その手術を受けて出産した患者さんの体験記が載っている」と言うのです。

私もすぐにその体験記を読み、希望がふつふつと湧いてくるのを抑えることができませんでした。子宮を失いたくないから広尾に行こうとは思っていましたが、まさか胎児を守りながら子宮保存手術をしてくれるとは思っていませんでした。その体験記は私が一番求めていた答えそのものでした。

検査当日の緊急手術

広尾に初めて行ったのは、T医科大で診察を受けた翌日、7月24日の金曜日でした。妊娠9週までなら子宮保存手術によって胎児を救うことができるというお話を聞き、とりあえず早急にMRIを撮って胎児の様子や筋腫のでき方を診たうえで結論を出しましょう、ということになりました。MRIの検査日は週明けの27日、月曜日と決まりました。

そして、27日月曜日。午前中に佐々木病院でMRIの検査を受け、その画像を持って広尾に行きました。画像をご覧になった斎藤先生は、こうおっしゃったのです。「今すぐ手術しないと、赤ちゃんがもたない。ちょっと麻酔の先生に聞いてみるから、待っていて」。

毎週月曜日は手術の日で、この日に手術を受ける患者さん二人はすでに入院して、手術前の処理などを受けているところでした。麻酔担当の先生も看護婦さんも、当然この日の手術は二人だけと思っていたはずですが、そこへ急遽、私の手術が加わることになったため、斎藤先生は念のため「麻酔の先生に聞いてみる」とおっしゃったのです。

もう、びっくりです。「今日、手術することになった」と両方の実家に電話をし、母には入院の持ち物を整えてくれるよう頼みました。

午後一番には、血液検査や心電図など手術に必要な検査を受けるためにまた佐々木病院にとって返し、私も家族も大慌てでしたが、今になって振り返ると、あれこれ考えるヒマもなく手術台に上がることができたのは幸いでした。

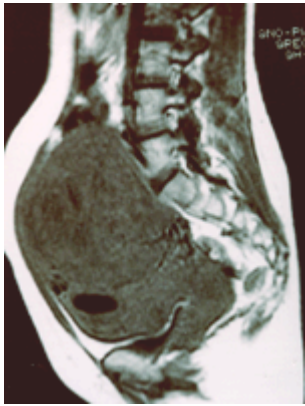
中村多恵さんとの出会い

ところが、驚いたことに、私のほかにもう一人、緊急手術となった妊婦さんがいました。中村多恵さんです。中村さんは前々日の土曜日にMRIの検査を受けていたそうですが、月曜日になってその画像をご覧になった先生が、急遽、手術することを決め、中村さんの職場に電話で連絡したとのことでした。MRIの検査当日に手術することになった私もびっくりでしたが、職場に「手術するから、すぐ来るように」との連絡が入った中村さんもさぞ驚いたことと思います。

同じ日に同じ手術を受けた中村さんと私が仲良しになったのは言うまでもありません。広尾を退院後は、二人とも晴れて「普通の妊婦」となり、先生のご紹介で東邦医大で妊娠の経過を診てもらいながら出産に備えました。

冒頭に書いたように、私は妊娠中毒症のため32週目での早産、それも緊急出産となりましたが、中村さんは50日あまり後に女の子を出産されました。今ではお互いに新米ママとして、子育てに追われる毎日です。この夏には、二家族で子連れで広尾に「里帰り」しました。

斎藤先生と同じ手術ができるドクターはほかにいないと聞き、幸運にも斎藤先生と出会って子供をもつことができたことに感謝するとともに、なぜ斎藤先生のようなドクターが育たないのかと残念に思います。私たちのような幸せに恵まれる女性が一人でも多く続いてほしいと切に願っています。

	術前 (pre ope)	術後2日目 (post ope 2nd)	術前 (pre-ope) のMRI
赤血球 (RBC)	6.1	305	
血色素 (Hb) (g/dl)	11.2	8.9	
ヘマトクリット (Ht)	33.2	25.0	
備考	妊娠9.3週目 筋腫合併 摘出物：平滑筋腫 720g 出血量： 613ml		

「手術後に夫に出会い結婚。妊娠も出産もできました」

黒田未来（32才）

女性としての悲しみ、そして喜び

結婚して2年後の4月27日、長女の菜々花（ななか）が生まれました。季節は春爛漫、菜の花のように明るく元気に、との願いを込めて命名しました。生まれた時には2,400グラムと小さかった菜々花ですが、母乳が大好きで、順調に育っています。今では上手にお座りもできるようになって、冬日が差し込むリビングで機嫌よくオモチャで一人遊びをしています。



20代で子宮筋腫が見つかった私にとって、こういう幸せな日常が訪れるとは考えてもみませんでした。当時は、子供をもつことはおろか一生一人で生きていくしかないとまで思い詰めたのですから。

主人と出会ったのは広尾で手術を受けた4ヶ月後。斎藤先生が「手術したら男運が変わるよ」と冗談めかして半ば本気でおっしゃいましたが、その通りになりました。結婚しようということになって、主人には広尾で手術を受けたこと、妊娠に支障はないと言われているけれど本当に妊娠できるかどうかはわからないことなどを正直に話しました。

結婚は97年5月。ところが、結婚してすぐに妊娠。思いがけない妊娠で、まったく手術のダメージを受けていないことに驚き、喜びましたが、残念なことに1ヶ月後に流産。やっぱり手術の影響があるのだろうかと思いましたが、原因はわかりません。妊娠できることがわかっただけでもよかった、と思うしかありませんでした。そして、流産から1年後に2回目の妊娠がわかりました。それが菜々花です。

私の20代後半からの5年あまりは、子宮筋腫の手術、結婚、妊娠、流産、そして出産と、女性としての悲しさと喜びを存分に味わった日々でもありました。その5年間の体験を以下にお話します。

ひどかった生理不順

初めて婦人科に行ったのは、友人の話がきっかけでした。結婚を控えていた友人はこんな体験を話してくれたのです。不正出血があったので婦人科を訪ねたところ、ポリープが見つかったの。でも、外来で手術を受けたら、簡単に治ってしまったわ。そんな話を聞いて、それなら私も行ってみよう、と近所に新しく開業したクリニックを訪ねたのでした。

私の場合は、それが不正出血なのか、それとも正常な生理による出血なのか判断がつかないほど、とにかく生理が不順でした。生理が始まって少量の出血で3日で終わってしまったり、1週間きちんとあって「今月はよかった」と思っているうちに、その後3ヶ月まったく生理が来なかったりと、生理の間隔も出血の量も予想がつかず、その時々でまちまちでした。

内診台で下腹部の触診を始めた医師が、「力を抜いてください」と何度も言うのです。別に力を入れているわけではないのに...と思っているうちに、医師の声が「あれっ?」というつぶやきに変わりました。

何事かといぶかる私に、医師は「男の人のコブシくらいの筋腫がありますね」と言いました。キンシュ?、まったく思いがけない言葉でした。それ、何?、という感じで、現実感がないまま、たぶんキョトンとしていたのだと思います。

私を現実に引き戻したのは、医師の次の言葉でした。「40代、50代なら全摘を強く勧めるのだけれど、あなたは20代でまだ独身だから、すぐに全摘というわけにも...。大きな病院に行って、そこで相談してみてください」。そして、順天堂大の浦安病院に紹介状を書いてくれました。

もう一子供はもてない...

ゼンテキ？、初めて聞く言葉でした。子宮を丸ごと全部摘出することだとわかると、医師の説明を聞きながら、頭の中で次から次へといろんな想念が浮かんできました。もう子供をもつことは無理だな...。一生一人で暮らしていくために、そうだ、マンションを買おう...。でも、子供の代わりにペットに夢中になるのはイヤだな...

なぜ瞬間的にマンションを買おうなんて思ったのか、今思い返してみると可笑しいのですが、その時は一子供をもてない自分の姿を思い描いて、この先結婚もできないだろうから、ピアノ教師をしながら一人で生きていかなければならないと、瞬時のうちにあれこれ想像をめぐらしたのだと思います。

半ば夢の中にいるような心理状態の私に、最後に医師がこう言いました。「ただ、世の中にはそうでない対応をしてくれる所もあるようなので、調べてみるといいですよ」。

そうでない対応、つまり、全摘以外の方法という意味です。この言葉が広尾へと私が導かれた伏線となるのですが、この時には広尾の存在を知るよしもなく、医師のこの言葉さえ頭の中を素通りしていきました。

後日、斎藤先生の本に巡り会い、子宮保存手術という方法があることを知った時に、鮮やかに記憶の底から浮かび上がってきたのがこの言葉だったのです。もしかしたら、あの医師は広尾のことをご存じだったのかもしれない。

両親になんて言おう...

初めて行った婦人科でまったく思いがけない展開となって、重苦しい気持ちに閉ざされて二日、三日と過ぎていきました。順天堂大への紹介状をもらってきたものの、すぐには行く気になれず、1週間ほど持ち歩いていました。

全摘手術という選択を突きつけられて、どうしようもなく落ち込みましたが、もうひとつの悩みは、同居している両親になんて話したらいいだろう、ということでした。

近所の婦人科に行ったことも、筋腫があると診断されたことも母には話していませんでした。ましてや、全摘手術を勧められていることを知ったら、どんなに驚き心配するか...

でも、言わなくちゃならない。ここまで事態がはっきりすれば、両親に話して何らかの対応を決めなくてはならないと思ったのです。

父と母を前にして、「ちょっと大事な話があるんだけど」と切り出すと、両親は「何？」と言いながら、何かを期待するような明るい表情を見せました。きっと、結婚したい人がいるんだけど...という話が出るものと思ったのでしょう。「実はね、子宮筋腫が見つかって...」と続けると、「えーっ」と両親の顔は驚きが変わり、そのあとはどんなやりとりをしたのかよく覚えていません。

母が見つめてきた1冊の本

意を決して行った順天堂大では、「将来、たとえ妊娠はできたとしても、出産までは無理。いつでも手術はできるから、いい時にいらっしゃい」と言われました。予想していたこととはいえ、すぐには受け入れることができず、もうひとつ別の病院で診てもらおうと訪ねたのが、自宅に近く世間的にも評価の高い聖路加国際病院です。

聖路加でも結果は同じ。穏やかな感じの医師は丁寧に診てくれましたが、全摘手術以外に方法はないといった話ぶりで、「帰りに窓口で入院のことを聞いて行ってください」と言いました。

それから何日かして、母が一冊の本を私に渡してくれました。タイトルには『子宮をのこしたい』とありました。斎藤先生の本です。母が近所の図書館で見つけてきたものでした。

「こういう病院もあるから、ダメモトで一度行ってらっしゃい」と母。さっそく本を読み、裏表紙に書いてあった所在地の電話番号をたよりに電話をかけ、初診の予約をとりました。

父の言葉で手術を決意

初めてお会いした斎藤先生の印象はエネルギッシュで、自信にあふれていて、エコーでの診察が終わると、「筋腫は日に日に大きくなっているのだから、解決を先延ばしにはしてはいけない。手術は早ければ早いほどいい」とおっしゃいました。今すぐ決断しなさい、と言わんばかりの迫力でした。大学病院の医師の「手術はいつでもできるから、いい時にいっしょい」という悠長な物言いとはなんて違うんだろうと思いました。

家に帰り、両親に相談しました。広尾ですぐに手術を受けるべきか、大学病院に通いながらもう少し様子を見るか、私自身がまだ決めかねていたのです。父は言いました。「様子を見るというのは、悪くなるのを待つこと。そうして諦めをつけさせて全摘しようとする医師より、今すぐに手を打つべきだと言う広尾の方を信頼したい」。この父の言葉で、広尾で手術を受けることを決断しました。

手術で摘出された筋腫は660グラム。病室でホルマリン液の袋の中に入っているピンクの塊を見た時には、こんなものが子宮に詰まっていたなんて、と本当に驚きました。

術後はいたって順調で、土曜日に退院し、翌々日の月曜日にはピアノを教えている生徒さんにレッスンをしました。まだ傷口の痛みはありましたが、自宅でレッスンをしていたので、椅子に腰掛けてピアノを教えることには支障はありませんでした。

とてもきれいな子宮に

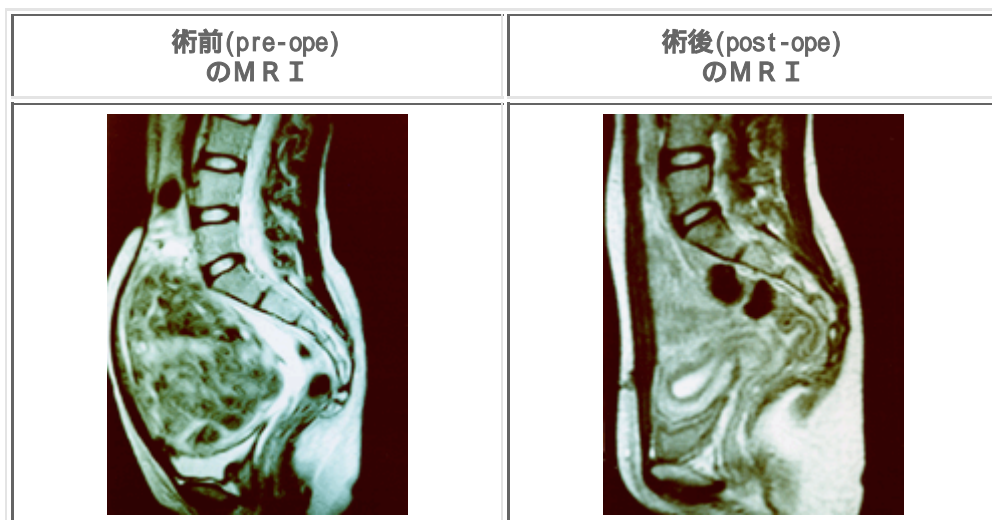
こんな後日談があります。菜々花を出産したのは聖路加国際病院ですが、妊娠がわかって初めて聖路加に行った時のこと、診察してくれたのは偶然にも4年前と同じ医師でした。

医師は私の顔を見て、カルテに目を落とすと、「あれっ、あなた、手術することにしたの？」と言うのです。「いえ、妊娠したみたいなんです」と私。「えっ、妊娠？」と医師は驚いたように私の顔を見つめました。きっと、ようやく全摘手術を受ける決心をして来たと思ったのでしょう。

そこで、あのあと広尾で手術を受けたことを話し、退院の時にいただいたファイルを見せました。医師は手術については何も質問されず、黙ってファイルを見ていましたが、出産の時の担当になった別の医師は、広尾の手術にとっても関心をもたれたようで、いろいろと質問をし、ファイルも興味深そうに見ていました。

妊娠38週目で帝王切開で出産となりましたが、出産後、担当の医師から「核出手術を受けているので癒着しているのではないかと考えていたけれど、癒着もなく、とてもきれいな子宮だった」と言われました。斎藤先生の技術の確かさが証明されたようで、とても嬉しく誇らしく思ったものです。

母が菜々花をあやしなながら、「菜々ちゃんは斎藤先生が授けてくれた命だね」と言うことがあります。本当にその通りです。心配をかけた父と母にとっても、菜々花は大事な宝物。可愛さはひとしおのようです。



	術前 (pre ope)	術後 (post ope)
赤血球 (RBC)	458	447
血色素 (Hb) (g/dl)	13.3	13.2
ヘマトクリット (Ht)	40.1	39.4
CA-125	49	23.7
備考	術前症状: 不整出血、腰痛 摘出物 : 660g 出血量 : 37ml 横切開 : 5cm	

「私、娘、妹がお世話になった斎藤先生との奇しき出会い」

千葉幸子（56才）

斎藤先生への手紙

斎藤先生

前略失礼いたします。
私と先生との出会いを書きました。先生との貴重な出会いが、インターネットを通じて、子宮の病気で悩んでいらっしゃる方に読んでいただけたら幸いです。
そのうち、病院の方にお邪魔したいと存じます。
お身体にお気をつけてお過ごし下さい。

母も叔母も子宮全摘

私は40歳を過ぎた頃より生理の出血がひどくなり、子宮筋腫があることがわかりました。私の母親は子宮筋腫のため子宮全摘をしており、母の2人の妹（私にとって叔母にあたりますが）も子宮全摘をしました。

自分も母や叔母たちと同じように子宮をとってしまわなければならないのかと思うと辛くて、何とかして子宮をとらずに筋腫を治療したいと思ってK大学に行きました。初めの頃は半年に一度、経過を診せに行くだけでした。ガチョウの卵位の大きさだと言われ、「はい、また半年後」、そんな繰り返しの病院通いをしているうちに、筋腫の大きさが男性の握り拳大位になりました。

フルタイムの仕事をしていましたが、ある時などは手の掌大のレバー状のものが次々と出て、足は力が抜けたようになり、震えが出たのを覚えています。そんなになっても自分で車を運転して1時間かけてK大に行き、輸血を受け、止血剤をもらって帰宅しました。

その頃には、尿を我慢するとオシッコが出なくなりました。夜ぐっすり眠ってしまうと、朝はお腹がパンパンになりオシッコを出すのに大変でした。そんなことが2～3年は続いたと思います。これは子宮筋腫が大きくなり、膀胱を圧迫しているためでした。

そのうちに立っているのも大儀になり、顔もドス黒くなり、もう手術しなければどうにもならない状態になってしまい、手術を受けるしかないと思うようになりました。

娘が勧めてくれた「婦人画報」

今度はT大に行って、何とか筋腫だけを摘出して子宮を残して欲しいと頼んでみましたが、「非常に難しい。出血が多くなると危険」とのことで、断られました。「子供も3人いることだし、もう子宮はいらないでしょう」というようなことを言われ、（そんな馬鹿な話があるものか、人間の一つ一つの臓器にいらぬものはない）と内心強く思いながらも、それを押し通すのはもう無理な状態になっていました。

K大で子宮全摘手術をすることにして、手術日も決まりました。その当時「婦人画報」で子宮筋腫についての記事の特集していましたが、その記事広告を見ても、もう入院して全摘手術を受けることに気持ちが固まっていた私は、今さら読む気にもなれず、ましてや子宮を残すという手術があることなど考えられませんでした。

「婦人画報」の記事を読むこともないまま時間が流れていきました。ところが、19歳の大学生の長女が、「婦人画報」を買ってこないかとさかんに薦めるのです。

娘の熱心な勧めで、それなら読んでみようか、という気持ちになり、その記事の中で出会ったのが広尾メディカルの斎藤先生だったのです。

子宮保存手術を始められて間もない頃でしたが、私は広尾で手術を受けることを決断し、齋藤先生によって子宮を残すことができました。

娘は手術後結婚し、1児の母に

それから11年が経ちました。子宮を残すことができたうえ、その後はいたって健康に過ごすことができ、感謝しております。

その後、私ばかりでなく、私の娘も妹も先生のお世話になるうとは、その時には思ってもみませんでした。なんという巡り合わせでしょうか、このご縁に深く感謝しております。

私に記事を読むよう勧めた娘は、23歳を過ぎる頃より生理痛がひどくなり、K大で診察を受けたところ、内膜症と言われました。ホルモン治療をすすめられましたが、経過ははかばかしくなく、25歳の時に齋藤先生に腺筋症の手術をしていただきました。手術では子宮筋腫の小さい芽も幾つかとっていただきました。

手術によって健康を取り戻した娘は、手術から1年後に結婚しました。それから1年して(手術をしてから2年後)なんと男の子を出産したのです。とても元気な赤ちゃんです。

私と齋藤先生との出会いは娘によって導かれましたが、その娘が先生のお世話になって現在の幸せをつかむことになるとは思ってもみませんでした。私の三つ下の妹は、私が手術をしてから2年後、やはり子宮筋腫の手術を先生にさせていただきました。おかげさまでとても元気になり、社交ダンスに夢中で人生を大いに楽しんでます。

母のきょうだいの女性はみんな子宮をなくしてしまいましたが、私と私の妹、そして娘は子宮を残すことができました。本当に感謝しております。娘は自分の子供に女の子が生まれたら、齋藤先生にお世話になるかもしれないから先生には絶対に長生きして欲しいと、ことあるごとに言っております。

お世話になった私と娘と妹の3人分の感謝をこめてお手紙を書きました。

[体験談レポート49号](#)榎本志摩さんが千葉幸子さんのお嬢さんです。



「母娘二代でお世話になって、今は一児の母」

榎本志摩（30才）

祖母も母も子宮筋腫

[体験談レポートの48号](#)で、母が「私、娘、妹がお世話になった斎藤先生との奇しき出会い」を書きました。私はその娘です。母をはじめ祖母、母の2人の叔母、そして母の妹（私にとっては叔母）と母方の女性は皆、子宮筋腫を患い、斎藤先生に出会った母と母の妹以外は全員が子宮を失っています。

祖母の時代には全摘手術しか方法がなかったのでしょうか。でも、母は全摘後の祖母や叔母たちのようすを見て、自分はなんとか子宮を残す治療を受けたいと願って、大学病院をまわっていたようです。

母がレポートに書いているように、母が斎藤先生が手がける子宮保存手術という治療法を知ったのは、当時19歳だった私が母に「婦人画報」の記事を読むように勧めたことがきっかけでした。大学生だった私がどうして「婦人画報」の記事に目を止めたかということ、通学途中の電車の中刷り広告で子宮筋腫に関する記事が載っていることを知ったからです。その頃の母は顔色も悪く、生理になると寝込むことも珍しくありませんでした。

この点、広尾で手術した若い患者さんの多くが、子宮筋腫だとわかったときに「キンシュ？ 初めて聞く言葉でした」と語っているのとは違って、私にとっては娘時代から子宮筋腫は耳になじみのある病気でした。

23歳で内膜症と診断

そういう家系ですから、いずれ私も中年になれば「筋腫持ち」になるだろうな、とは思っていました。ところが、中年どころか20歳を過ぎる頃から生理の異常を自覚するようになりました。生理が始まると下腹痛がひどく、経血にドロドロしたレバー状のものが混じるようになり、出血量も並みではありませんでした。それが月を重ねるごとにひどくなるのです。

23歳の時にはじめて母に伴われてK大病院に行きました。ここの産婦人科に母が旧知の先生がおり、母自身も子宮筋腫の治療をここで受けていたことがあります。診断の結果は内膜症とのことで、「早く結婚して子供を産みなさい。そうすれば、よくなるから」と言われました。（独身の私に、そんなこと言われても...）と思ったものです。

K大ではホルモン治療を勧められましたが、勤務先の同僚にスプレキュアを使っている人がいて、副作用がいろいろとあることを聞いていましたので、これは見送りました。代わりに服用したのが漢方薬です。小田原の漢方医の処方でも内膜症に効果のある漢方薬をしばらく服用しました。

たしかに初めのうちは症状が軽くなったのですが、そのうちにまた生理が重くなり、元の状態に逆戻りしていくのを自覚するようになりました。特に下腹痛がだんだんひどくなり、耐えられずにバファリンを1回に4錠も飲むようになっていました。

声も出せない痛さ

母が広尾で手術をしているのに、なぜ最初から斎藤先生のところへ行かなかったのか、と思われる方もいるでしょう。決して斎藤先生の存在を忘れていたわけではないのです。母の手術の2年後には叔母も斎藤先生に子宮筋腫の手術をしていただいたので、この時には叔母を見舞い、病室で叔母の子宮から摘出したというゴツゴツした白い塊を見たのを覚えています。

そこで見た筋腫の塊の印象がよほど強烈だったのでしょうか。そのうえ、母も叔母も子宮筋腫でお世話になっていますから、斎藤先生は子宮筋腫しか手術しないと思い込んでいたのです。それは母も同じでした。

そうこうするうちに、生理痛はますますひどくなりました。夜中に痛みで目が覚め、あまりの痛さに階下に寝ている母に助けを求めようにも声にならず、這うようにして階段を下りたこともありました。（こんな痛い辛い思

いがいいいつまで続くのだろう…。もうイヤだ。次の生理がこわい…。考えるのは子宮のことばかりです。

私のそんな心理状況は母にも伝わっていたのでしょう。心配した母が斎藤先生に相談してくれて、内膜症も手術できること、そして手術によって子宮を残して完治することがわかったのです。

早くラクになりたい

手術で治るなら一刻も早く手術したい、次の生理が始まる前に手術したい、と私の心ははやりました。一番早い検査日と、一番早い手術日を予約しました。解決の道が開けたからには、しかも母も叔母もお世話になった斎藤先生に手術していただけるのなら、とにかく早くラクになりたい。初めて母とK大病院に行った時から2年近くが経っており、迷いはまったくありませんでした。

MRIの画像をもとに説明を受けて、(やっぱり、悪いところがあったんだ。でなければ、あんなに痛いわけがない)と納得しました。納得というより、異常な生理の原因がはっきりして安心した、という方が正しいかもしれません。右の卵巣が腫れているのも画像で確認できました。

手術は平成7年の9月4日。摘出物は右の卵巣の一部1グラム、内膜ポリープ1グラム、子宮筋腫4グラム。合計量でわずか6グラムですが、これが尋常でない痛みと出血をもたらした元凶でした。筋腫の芽もていねいに取り除いてくださったそうです。放っておけば、母や叔母のようにリッパな筋腫に育ってしまうところでした。

1年後に結婚

術後1年が過ぎた平成8年の11月に結婚しました。学生時代から付き合っていた彼と結婚しようという気持ちになったことと、手術によって正常な生理を取り戻したことは無関係ではありません。

術後の最初の生理こそ少し下腹痛がありましたが、2回目以降は痛みも異常な出血もみごとに解消し、26日周期できちんと生理がくるようになりました。それは術後4年半が過ぎた今も変わりません。

結婚することになって、彼には「手術で子宮にメスが入っているので、もしかしたら子供はできないかもしれない」と告げましたが、彼は「子供がいなくても、2人で楽しい人生を送ればいいじゃないか」と言ってくれました。その言葉がどこかで心の支えになっていたのでしょう、私自身、妊娠や出産にそれほどの期待を抱かずに結婚生活を踏み出したのです。



結婚して4カ月ほど経った頃から、体調の悪い日が続きました。なんとなく食欲がなく、元気が出ない。そう言えば、26日周期で一日として遅れることのなかった生理が来ない。(きっと体調が悪いせいで、生理が遅れているのだろう)とっていました。

生理が遅れば妊娠を疑うところでしょうが、妊娠できるとは思っていなかった私は、それを(ひょっとしたら妊娠?)とは考えなかったのです。生理の遅れを気にして妊娠試験薬を買ってきたのは主人のほうでした。

元気な男の子が誕生

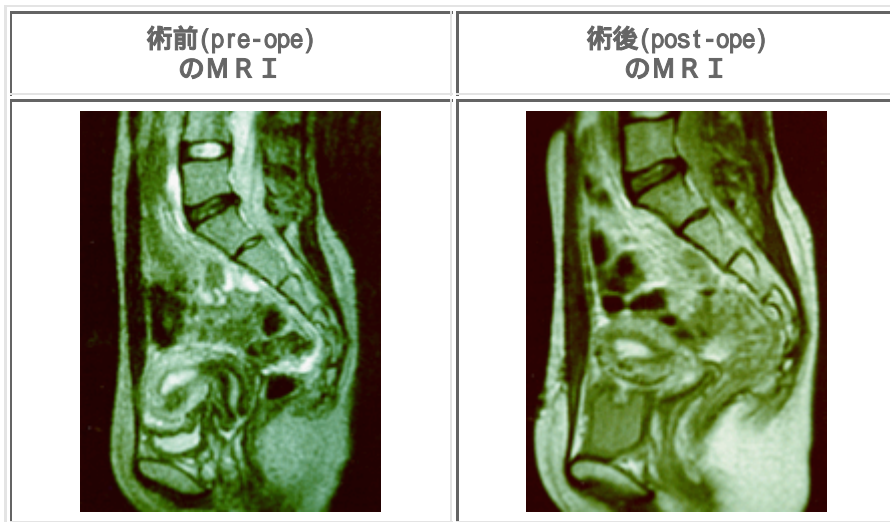
平成9年12月に長男、大空(そら)が誕生しました。妊娠中の経過は順調で、手術の時の傷口も小さかったからでしょうか、出産は自然分娩できるかもしれない、と出産した病院で言われていましたが、結局、逆子が最後まで直らず37週目に帝王切開で出産しました。

生まれたばかりの大空は過呼吸の症状が見られ、数日後には黄疸も出たため保育器に入りましたが、初めて保育器の中の大空に直面した時の感激はひとしおで、思い出すと今でも胸が熱くなります。帝王切開したお腹を気遣う看護婦さんに、「赤ちゃんを見に行きますか、どうします?」と聞かれた時には、這ってでも行きたいと思いました。



小さく産んで大きく育て、という言葉がありますが、2544グラムで生まれた大空はその言葉通りにすくすくと育って、今は体重15キロ。元気いっぱいな2歳児です。ひとときもじっとしていません。はだして飛び出して、庭続きの祖父母の家に出発して、おじいちゃんに「大空、靴はどうしたの」なんて言われています。

妊娠がわかった時に、主人とこんなことを話しました。「もし、生まれてくる子が女の子だったら、きっとまた斎藤先生のお世話になるから、今から手術代を積み立てておこうか」と。もし大空の次にも子供に恵まれて、その子が女の子だったらと思うと、斎藤先生には少なくともあと30年はがんばっていただかなくてはなりません。先生、お体を大切に、いつまでも子宮保存手術を続けてください。



	術前 (pre ope)	術後 (post ope)
赤血球 (RBC)	390	450
血色素 (Hb) (g/dl)	10.3	12.8
ヘマトクリット (Ht)	31.4	38.5
備考	長年の生理痛、生理過多、吐気、目眩 病理 : 腺筋症	

「可能性を残してくださった広尾メディカルに感謝します」

荒井真由美（33才）

運命を決めた3月10日

3月9日

3月9日、香港の夜景を見ながら、私は決意を固めていました。「手術してたとえ子供を産める可能性のない体になっても、前向きに生きていこう。」と。

私はその前の2月25日に某市民病院で聞かされた検査結果を思い出していました。

「MRIを含めた検査の結果、子宮にはかなり大きい筋腫があり、その上、卵巣にも腫瘍があります。まだお若いので子宮の方は大きい筋腫を取るという手術をします。卵巣は左の方の腫れがひどく、もし将来悪さをするといけないので、取ってしまった方がいいかもしれません。ただ、おなかを開けてみないことには何とも言えません。手術は早い方がいいと思いますので、ご主人とよく相談の上、都合のつく日を決めて再度いらしてください。」

その日は、どこをどうやって無事に家に帰ってきたのかよく覚えていません。ただ、この日はそのまま家でずっと泣いていて、真夜中になって、「これが自分の人生なら、泣くのは今日限りにして、明日からはまた普段通りの生活に戻ろう」、と自分自身に言い聞かせたことだけははっきり覚えています。

気晴らしを兼ねて、主人が長期出張で滞っている香港へ出かけることにしました。既に電話で主人に事実を話しており、香港での私の様子から、主人は私がかかなり落ち着きを取り戻している（今思えば、本当は自分に起こった一大事を人ごとのようにとらえて悲しみから逃れようとしていたのかもしれませんが。）と思ったそうです。二人で、「手術は大変だけど、とにかく病気を治すためにがんばろうね。」などと話をしました。この時は、まさかその他の選択肢が登場するだろうとは夢にも思っていませんでした。

3月10日

3月10日の朝、私は、まだ香港に残らなければならない主人より一足先に帰国しました。なぜなら、翌日に病院に行き、再度詳しい話を担当の先生から聞いて、手術日を決定することになっていたからです。

とはいえ、心のどこかにきつとあきらめきれない気持ちが残っていたのでしょうか。ひょっとしてインターネットを覗けば、何か違う情報が見つかるかもしれない、と思い、検索エンジンから「子宮筋腫」と入力して、広尾メディカルのサイトにたどり着いたのです。

それを読んでからの私は、もう迷うことはありませんでした。まだ斎藤先生にもお会いしておらず、誰にも相談していませんでしたが、「私はここで手術を受けるんだ。」と、はっきり決意しました。3月10日の夜6時頃の事だったと思います。

主人にはすぐに連絡し、サイトに目を通してもらうことにしました。その後主人が特に反対することもなく、金銭的なことも一切問題にせず、「よくこのサイトを見つけたね。きっといい結果が出るよ。」と全面的に私の決断を支持してくれたことに今も感謝しています。

3月11日

3月11日の朝一番に広尾メディカルに電話をし、次の日に診ていただけることになりました。

この日は、一応某市民病院へも出向き、結果を詳しく聞きました。もうこのときの私は全く不安になることもなく、むしろ担当の先生からいろいろ聞き出して知識を増やそうなどと強気(?)でした。その後、手術の日程についてはまだはっきり主人と決めていないと言ってそこはうやむやにして帰宅し、後に病院にキャンセルの電話を入れました。

3月12日

3月12日に広尾メディカルに伺い、初めて斎藤先生にお会いした時、私は心の底から神様に感謝しました。

斎藤先生は、おなかの上から少し診察しただけで、「大丈夫、この子宮なら十分残せる、もっとひどい人をたくさん救ってきたよ。」と自信たっぷりにおっしゃってくださいました。

そして、女性にとって子宮がいかに大切な、軽視されてはならない臓器であるかということを経験を聞いて話してくださいました。更に、私のそれまでの経緯を聞いてくださった後で、「それは、あなた、それで手術を決意しようとしたっていうのは少し安直だったんじゃないの？今は、努力すればいろいろ

な情報が手に入る時代になったんだから。」と、少し厳しい意見(?)まで頂戴してしまいました。その日にすぐ手術の予約を入れていただいたことは言うまでもありません。

また、この日初めてお会いした看護婦の皆さん、事務局の方がとても感じが良かったことも大変印象的でした。

私にとっては、この決定をするに至った2, 3日のことは、何か見えない力に支配されたようで、今でも強く心に残っています。

待ちに待った6月7日

手術当日

いよいよ手術当日がやって来ました。前の晩はそれでもやはり緊張してしまい、2、3時間しか眠れなかったような気がします。

午前9時15分頃到着し、病室に入りました。看護婦さんが手術前の処置をいろいろ施してくださって、私の手術の順番は最初の1時からということになりました。しばらく病室で待機した後、12時30分に看護婦さんが呼びにられました。この時、手術室まで歩いていったのですが、てっきりベッドで運ばれていくものだと思っていた私は何か拍子抜けしたような気分になり、却ってこれで少し緊張感が和らいだのを覚えています。

手術が始まってからも、実は全く記憶が失われたわけではなく、おなかの方で何かしていると言う感触はありました。また、手術中始終話し続けていたこともかすかにですが覚えています(後日、斎藤先生や看護婦さんによると、手術中はとてもおもしろかったということらしいのですが、残念ながら自分が話した内容までは覚えていません。)

斎藤先生と麻酔科の先生の方針により、手術に際して使用するのは全身麻酔ではなく、硬膜外麻酔、仙骨麻酔の併用ということで、これは患者の肉体的負担を軽くするのだそうです。そういうわけで、時折私のように、手術中もそれなりに意識がある場合もあるらしいのですが、多分私はこうした先生方の計らいのおかげで、結構恥ずかしい姿を手術中に皆さんにさらしてしまったようなのです。

手術の最後に主人が呼ばれたらしいのですが、主人も、何か言っている私を見て、「本当に手術を受けた人間なんだろうか。」と、真剣に思ったそうです。

こんな調子でしたので、その後の回復は結構早かったと思います。

術後2日目

翌朝、斎藤先生が病室に来られ、「顔色がいいのできつと回復が早いよ。」と励ましてくださいました。そして、「あなたが他で手術を受けていたら、きっと子宮はもちろんのこと、卵巣も両方とられていたかもしれないよ。本当に運が良かったね。全部きれいに残せたんだもの。」と、しみじみとおっしゃったのを私は忘れることができません。実は、私は、子宮筋腫に左右両側の卵巣腫瘍まで併発していたということで、斎藤先生に手術していただいていたいなければ、いったいどうなっていたのだろう、という、まさに崖っぷちのところまで来ていたのです。本当に、手術中ペラペラと話をしている場合などではなかった、という感じでしょう。

その日の3時には、もう(!)尿管が外されて、歩行練習をするように看護婦さんに言われました。この時、私は、広尾メディカルの治療方針をはっきり示されたような気がしました(あくまでも私の推測ですが)。

“後はあなたがどれだけ自分の体を自分で早く治す気があるか、にかかっていますよ。がんばってくださいね。”

私は、入院している間、斎藤先生をはじめ看護婦の皆さんの親身な、暖かいケアの中にも、こうした良い意味での厳しい姿勢を感じ、私自身も早く良くなるように努力しよう、と思いました。結局、月曜日に手術して土曜日に退院という、開腹手術にしては非常に短期間の入院ですむのは、斎藤先生の素晴らしい技術があるのはもちろんですが、こうした広尾メディカルの一貫した治療方針によるところも大きいのではないのでしょうか。

また、その日の夕方には待ちに待った夕食(私はなぜか、この日の朝から食欲があり、食事の時間を首を長くして待っていました。)が登場しました。確かブルーングジュースが出ていたと思うのですが、口にした時は本当にうれしかったです。

術後3日目

3日目(水曜日)には、2階のリビングへも上がっていけました。午後には、来週手術を受けるという方、話を聞きに遠路はるばるやって来た、という方ともお会いしたりして、この病気で悩んでいる人と話をする機会も持ちました。

術後4日目

4日目(木曜日)には、シャワーを浴びることが許されました。看護婦さんの助けをお借りしながらも、一つ一つ自分でできるようになって、回復に近づいていくことに大きな喜びを感じました。

術後5日目

5日目(金曜日)には、恒例(となっているようです)のお昼のお茶会がリビングで行われました。斎藤先生をはじめ、看護婦の皆さん、事務局の方、またこの日話を聞きに来た方も交えて、約2時間ほどいろいろな話をして楽しみました。この日になると、多少傷の痛みはあるものの、ほぼ日常生活には何の支障もないレベルまで来たことをはっきりと実感しました。夜は持ち込んだラジオで大好きな番組を聞きながら、本当に斎藤先生に出会えて良かった、自分の決断は間違っていないかった、うれしい思いでいっぱいでした。

術後6日目

6日目(土曜日)、退院の日です。
この日の朝、斎藤先生は、同じ日に手術を受けた方と私を、朝食を食べに行こう、とドライブ(!)に誘い出したのです。みなとみらいまで連れて行ってくださったのですが、この日は6月とは思えない天気の良いさだったのを今も鮮やかに思い出します。

この後、主人と私の両親が迎えに来てくれて、本当にあっという間の退院となりました。
私の両親は、月曜日に手術をした私の顔色が良く、普通に歩き、食事もできるということに心底驚いていました。ですが、そんな自分の姿に一番驚いていたのは、他にもない私自身だったと断言できます。

喜びをかみしめた7月10日

退院後2週間

晴れて退院した日から2週間ほどは、実家の母に家事などを頼み、なるべく無理をしないようにしました。

退院時に、その後の生活上における注意事項、自分で行う傷口の処理について説明を受けます。特に、初めて自分で傷口の処理をする時には、少し緊張するのですが、2日に1回のペースで薬をつけたりガーゼを貼ったりしているうちに、どんどん傷口がきれいになってくるのが自分で実感できます。初め、心配そうに私が処置するのを見ていた母も、慣れてくると、「今日はどんな調子?」などと覗き込んで、2人で結構その過程を楽しんだり(?)もしました。

斎藤先生の行う手術では、傷口の縫合の際、体内に吸収される特殊な糸を使用するため、手術後の抜糸はありません。その分自宅での自分による処置が必要となるのですが、手術後の自己管理が徹底できるという点で、これも広尾メディカルらしい方針だと思いました。

退院後3週目

3週目に入ったある日のこと、郵便受けに大きな茶封筒が来ており、確認してみると斎藤先生からのものでした。

すぐに中を空けてみると、手術後摘出物の病理解剖結果でした。「全て良性ですのでご安心ください。」という先生からの手紙も同封されていました。
広尾メディカルでは、すべての患者さんに、MRI画像も含む手術前の検査結果、手術中の様子などを詳しく記述したファイルを作ってください、退院する時にそれをいただくことができます。それだけでも十分ありがたいのですが、このようにして、患者の不安を和らげるための事後のフォローまで万全です。

退院後4週目

退院して4週目に入ると、すっかり体調も元通り、といった感じでした。回復したらあれもしよう、これもしよう、と考えていた私は、日常の買い物、仕事上の勉強など普段通りに再開しました。看護婦さんからは、「4週目になったらテニスもしていいですよ。」と言われていましたが、夏の間は暑いし、無理をして違うところまでけがをしては何もならないので、9月になったら復帰しよう、と勝手に主人に宣言しました。ただ、この時には、どこかのバーゲンに出かけていったのを記憶しています。それだけ回復していたということです。

そして忘れもしない、4週目の土曜日、7月10日のことです。
斎藤先生からは、「手術後約1ヶ月で生理が来ますよ。」と言われていましたが、開腹手術を受けた割には思っていたよりも回復が早かったことがうれしくて、正直言って生理のことはあまり気にしていませんでした。

ですが、実際生理が来てみると、今までの一生の中で、こんなにうれしい出来事はなかった、というくらいに感激しました。主人もこの時は本当に喜んでいました。

思えば、「手術をしても自分の体に女性としての機能が残る可能性はないかもしれない。」と覚悟したのはほんの4ヶ月ほど前のことでした。

生理がある、というあたりまえのことに、これほど感謝したことはありませんでした。そして、この日から、自分の中で、本当の意味での「第2の人生」のスタートとなった気がします。

ふりかえってみて

早いもので、手術を受けてから半年以上が経過しました。日常生活上、本当に何の問題もなく元気に生活しています。生理も周期を守って順調にやってきます。

私の場合、一番初めに子宮に筋腫があると判明したのは人間ドッグでの婦人科検診時でした。その後すぐにある病院に行きましたが、その時の先生が「しばらく様子を見ましょう。3ヶ月ほどしたらまた来てください。」というだけで、特に何も治療らしい治療をしなかったのと、それほど自分に苦しい症状が出ていなかったこともあって、1年間はそのまましておいたのです。

ですが、やはり心のどこかで「いつかは病気ときちんと向き合わなくては。」という思いがあり、次の病院（某市民病院）を探し、冒頭にあるような診断結果を下されました。

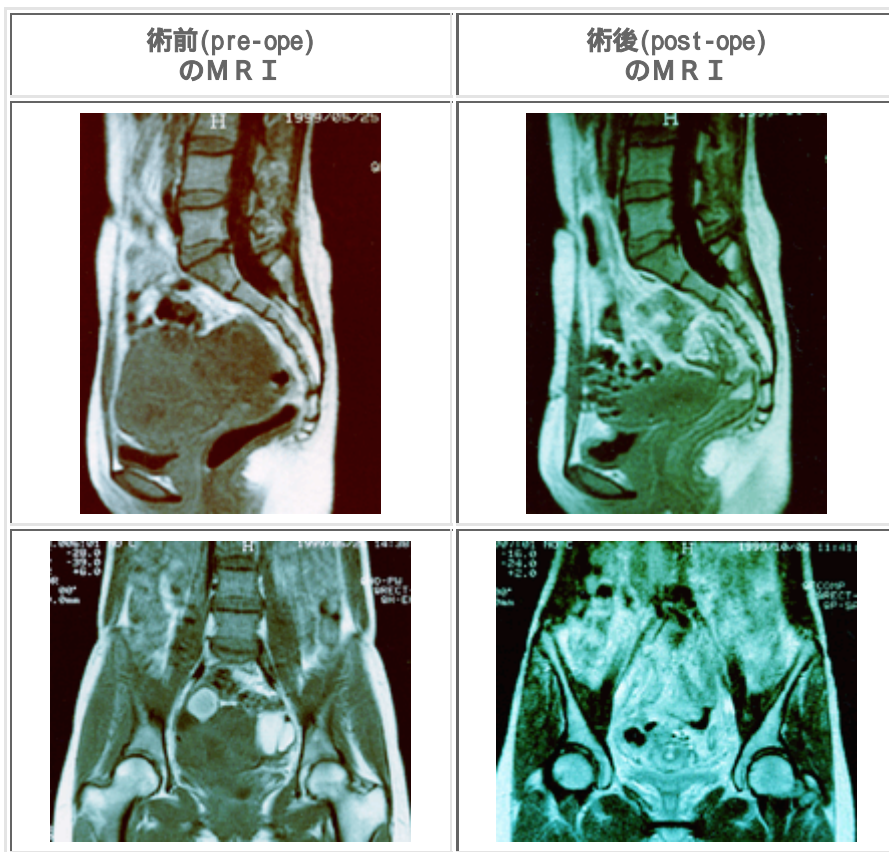
3番目にたどり着いたのが広尾メディカルということになりますが、こうしてふりかえってみても、各々の先生によって異なる選択肢が提示されたわけで、それだけ子宮や卵巣に関連する病気というのは難しい部分があるのだと思います。

現在、日本では女性が子供を産まなくなるとよく言われますが、その一方で、こうした病気に苦しみ、その結果子供を産める可能性を絶たれてしまう女性も数多く存在すると思います。

斎藤先生によるすばらしい手術のおかげで、幸運なことに私はとても納得のいく結果を得ることができましたが、こうした手術のできる医療機関がこれからもっともっと増えなくてはならないと痛感しています。不幸にして子宮や卵巣に病気が発生したら、「取ってしましましょう」というのではなく、患者の立場としては、やはり通常の臓器のように（たとえば胃や腸のように）、その機能を温存したままでければよりよい状態に治していただきたいのです。

この先子供を産める可能性が自分の体に残ったことを、心からうれしく思います。

最後になりましたが、斎藤先生をはじめ麻酔科の先生、看護婦の皆様、事務局の方、また、私の決定を信じて応援してくれた主人、両親に心から御礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。



	術前(pre-ope)	術後(post-ope)
赤血球(RBC)	481	455
血色素(Hb)(g/dl)	13.6	13.1
ヘマトクリット(Ht)	41.1	39.0
CA19-1	110	11
備考	摘出物：子宮筋腫 365g 内膜ポリープ 0.5g 腺筋症 10g 左卵巣部分切除 0.5g 右卵巣部分切除 0.5g 病理：良性	